
夢を渡る

～ふあい～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢を渡る

【Nコード】

N6318J

【作者名】

くふあい

【あらすじ】

夢を見ない「少年」と、病で死にゆく青年を繋ぐお話。ファンタジーか、恋愛か。文学か…それは僕が決める所とはならない気も。

夢とコピー

僕は夢を見たことがなかった。

18歳と2ヶ月になるその日まで。

いや、夢は一般的にみんなが見るものだと言っから、ここでは覚えていないというのが正しいのかもしれないけれど。

でも、何となく。

僕は夢を見たことがない気がしていた。

一日は今日も単調な小説のように曖昧に過ぎていった。

高校三年生という年齢からして、普通は受験という関門に向けてがんばっていかねければならない年頃なんだろうと思う。

実際、クラスメイトの中にも数人ながらそういうやつはいて、かなり必死になって勉強にいそしんでいるのが見受けられる。

しかし、僕を含め、大多数はそんなことはなかった。

なぜなら、この高校は大学までエスカレーターの特立校。それにその上になる大学は、私立としてはかなり名の通った一流大学といって差し支えないところなので、無理に受験する人はまれだった。

ちなみに、ほかの大学を受験した生徒も、万が一落ちた場合、普段の成績に問題がなければ、やはり系列の大学に入学することができるので、受験生といえども、やはりほかと比べると、そこまで気が入っていないのかもしれない。

まあ、とにかく、僕は残り三ヶ月程度の高校生活を、慣性惰性の上をすべるように生きていた。

昼休み。

僕はクラスメイトの君津と弁当を食べていた。

その話を聞いたのは、ちょうどその時。

「なあ、おまえって夢を見るか？」

君津は何の脈絡もなくその話を振った。

「いや、あんまり」

本当は全く、というのが正直なところだが、何となく僕は言葉を濁して答えた。

「そうか、いや、実はさ、必ず夢を見れる姿勢っていつのがあるらしいんだよ」

「は？」

「いや、寝るときに仰向けになってさ、手をここう、胸の上に重ねておいて寝たら、必ず夢を見るんだって」

「ふ〜ん」

返事よりは僕は興味を持っていた。

「でも、必ず悪夢になってしまうらしいぜ」

「なんだ。だめじゃん」

「でも、試してみろよ。肝試し代わりに」

「なんで寝るときに肝を試さなきゃならないんだよ。肝の無駄遣いだろ」

とは言ってみたものの、実際は心の中で多少ゆれていた。

夢を見ることができると…しかし、必ず悪夢になる…。

正直、夢を見てみたいと思ったことは多々ある。

普通の人には絶対にわからないだろうが、全く夢を見ない睡眠とというのは、案外とつまらないものだ。楽しい夢も悲しい夢も気分が高まる夢もがんばれる夢も…

僕は一切、見たことがない。

とはいえ、そんな他愛のない話、そこまで心に刻み付けられたわけではなく、午後の授業が始まる頃にはほとんど無意識の向こう側へその話を追いやってしまったていた。

三年生の冬にもなれば、もう部活もなくなってしまうので、僕の一日は、たとえ学校が終わった後でも、やっぱり、消えるだけ

の時間の上を流れるだけだった。

だから、夜電気を消すときに、あの話を思い浮かべたんだろう。きつとほんのもう少し、楽しいことか、悲しいことか、気分が高まることか、がんばれることがあれば、そんな話は思い浮かべなかつただろう。

つまり、僕が電燈の紐を三回引くときに、君津の話を思い浮かべていた。

多くの人はそうかもしれないけれど、普段から僕は仰向けで寝ている。

限りなく黒に近い群青のような部屋の奥側。ベッドの上に僕がいる。

昔から、眠る前に色々考える癖があった。

最近では、一番頭を使うのは、まさにこのときかもしれない。

進路は磐石に決まっているくせに、いつのまにか僕は将来のことを考えていた。

これから僕はどうなっていくのだろうか？

正直、どこに行くも何も、その大学に行っておけば、それほど就職に困ることはないはずだったから、それなりの会社にそれなりに入って、そこそこそれ以上の給料をもらっていくだろうことは、目に見えていたはずだ。

それでも、僕は考えていた。

これから僕はどうなっていくのだろうか？

夢というのは、脳の記憶を整理するために見るものらしい。

だから、夢を見ない僕は、脳が整理されていないんじゃないかと、時々考えることがある。だから、こんな矛盾したこととか、ちぐはぐなことを考えてしまっんじゃないだろうか？

ふと、僕は胸の上に手を重ねてみた。

こうすれば、僕の脳は整理されるだろうか？

こんな風に流れるように日々を生きているくせに、流れるような日々を悩んでしまうようなちぐはぐを解消できるだろうか？
そんな風に考えたかどうかは、よく覚えていないけれど。
おそらく僕は、胸の上に左手と右手を重ねたまま、
苦しむこともなく眠りに堕ちた。

どろどろとしたものに体が包まれているような。
始めはそんな感覚だったように思う。

少なくとも、眠りに堕ちた次の瞬間には、朝日が窓から差し込んでくるような（僕の家は東向きだったろうか？）、そんないつもの眠りとは様子が違った。

誰かに呼ばれている気がした。
遠くで。

いや、何かに反響して。

「……………」
よく、聞こえないが…それでも、誰かに呼ばれている。そんな気がした。

いや、何か語りかけている？

「……………」
僕はうつすらと目を開ける。

「あ、気がついた？」

ユーリは僕が寝ているベッドのそばに座っていた。

「…あれ？」

そこは、いつもの寝室だった。
暖炉がとうとうと燃えている。

丸太で作られた家…つまりログハウスは、暖炉のやわらかい炎によつて、暖かく照らされていた。

僕を覗き込むユーリの顔も、同じように。

「しばらく、寝ていたんだっけ…あれ？そうだけっけ」

「もう、何とぼけたこと云ってんのよ…」

「え？」

本当に思い出せない。僕はどうなったんだ？

「もしかして本当に覚えてないの？」

「うん」

「自分の手とか、見てみなさいよ」

「え？ ああ…」

僕の右腕は、いつもと特に変化がなかった。

でも左腕には。

斑の刺青のような模様が刻まれていた。

「全く。正直死んだかとも思ったわよ。よく調べてみたら、心臓は動いているから、そんなことは無いってすぐに解ったけど」

「冷静だな」

「覚悟はできてるからね。もうしょうがないもの」とりあえず、僕は今回は乗り切ったらしい。

「明日、また病院にいこ」

「ああ」

ユーリの顔に限界まで近づいて、キスまでしてみたけれど、それでも、彼女は涙の後を見せていなかった。

こんなことは、世界で見れば日常になってしまったから。

僕らは時間の限りをベッドの中で過ごして、いつの間にか寝てしまった。

翌朝。世界は変わっていないようだ。

いつも通り起床は東の窓から日が差し込んでくる頃。僕らは目を覚ます。

ほとんどいつも変わらない。太陽が僕らに朝を与えてくれる。

暖炉は当然ながら、いつの間にか燃え尽きてしまっていた。

「おい、起きてよ」

くつついて寝ているユーリを起こす。相変わらず寝起きが悪く、何度か体をゆする。

「また暖炉消してから寝るの忘れちゃったよ。いつか火事になっちゃうぞ」

「ん〜」

確実にユーリは聞いていなかった。僕はユーリの体をはがすように、一人ベッドから出た。

新聞というものができてからというもの、世界のことがよく伝えられるようになった。

それが本当のことなんだとしたら、今朝も実にたくさんの方が世界中で起こっていた。

たくさんの方が売れて

たくさんの方がお金を稼いだ

たくさんの方が事件に巻き込まれ

たくさんの方が死んだ

それでも、今日もやっぱり目にしてしまうのは聖籠病の罹患率、そして死者数つてことになるんだと思う。

「昨日はやつぱり『Deadline』だったみたいだな。これではばらくは大丈夫って訳か」

「聖籠病」：死に至る病。人類に不平等に、ランダムに襲い掛かる病。

罹ったものは、長い年月の後、苦しむことなく突然倒れ、命を失う。

まだその年月がどれくらいなのかは判明していない。しかし、概念が確立されたのを皮切りに、その長さ「潜伏期間」もやがて明らかになるだろう。

しかし、この聖籠病患者が、かなりの人数、世界中でまとめて死ぬ日が時々ある。『Deadline』と呼ばれるその日は、その暦を用いて云えば、大体一年に二回やってくる。しかし、一年のう

ちのいつにやってくるのかは未だ謎で、これもある程度ランダムに決められていた。いや、今のところはランダムだと思われる。

だから、僕らは、新聞を見て、大量の人間が、聖籠病によって死んだ日を見ることで、あとになって、それが『Deadline』であつたことに気づくのだつた。

「おはよう…体は平気？」

ユーリがやつとベッドから這い出てきた。

「ああ。寒くない？」

「寒い。見て解るでしょう…？」

彼女は急ぐことなく服を着て、僕が座っている向かいのいすに座つた。

「暖炉、もうすぐ暖まるよ。」

「ありがとう」

ユーリはまだ眠そうに目をこすっている。

「昨日は『Deadline』だつたみたいだよ」

「そう、危なかつたわね」

「うん。でも乗り切つた」

「乗り切つた」

ふふ、と笑い合つた。

云うまでも無く、僕はその聖籠病にかかつていて、彼女は全くその傾向が見られない。

この聖籠病は、ほかの病気と違って、100%ほかのひとに伝染しないといわれている。帰納的な見地からすれば、それは正しいよつで、この病気が確認されてから、患者に接触したことによつて感染したという報告は無い。

そして病気は、普通の生活には何の影響も無いから、いつか死ぬ、という特記事項を除けば、僕は普通にほかの人と一緒に生活を送る。ユーリと生活を送る。

あとの違いは、しいて言えば、時々病院に行く位か。

かつては病気に対する差別や偏見が相当根強かつたらしいが、最

近は、それが伝染性を全く持たないということ、そして、罹患数が（新聞を信じるのならば）世界の人口の70%近くということ、いまやこの病気を持つほうが普通、という風になってしまったので、差別を感じたことは特に無い。

そして、誰もか死を驚くほど受け入れられている。

自分が病気にかかっているか。

或いは、大切な人が病気にかかっているか。

ほとんどの人はそのいずれか、それが当たり前だから。

死は、吃驚するくらい唐突にやってくるものだ。

僕らはもう、その感覚で心を浸してしまっている。

僕はユーリと一緒に外へ出た。

自分と世界の境界線が鮮明な冬は好きだ。いや、この病気になつてから好きになった。

例えばそれが、植物にとって非生の季節でも。動物が、殆ど見当たらないとしても。

僕らは手をつないで冬色の道を歩く。いつまでも一緒にいられるわけがないから。今はできるだけ、一緒にいたいって事だ。

「病院の後、どうする？」

「んーと、そろそろ食べもの買わないと。もうすぐ冬のお休みでしょう？」

「…そうだね。お店が閉まってしまふ前に、買っておかないとね」

「今日も病院長引くのかしら？」

「多分また薬草を飲まされるだけだよ」

「そっか」

ユーリはにこりと笑う。

さく、さく。足下の雪が軽い音をたてる。

「あと、本屋に行こう。本をたくさん買いたいの」

ユーリが続ける。

「ユーリ、最近本をよく買うね。あれ、でも、あんまり読んでいる所を見ないような…」

僕が宙を見ながら首を傾げていると、彼女はやっぱり笑って。

「まだ読まないでおくの」と云う。

僕はその意味が解らなかったが、或いは解りすぎていたから、特に聞き返しはしなかった。

道端の森の針葉樹の枝から、とさりと雪が落ちた。

「コーヒー飲んだら、また眠れなくなっちゃうね」

目の前に座るユーリが、カップを片手に云う。

「…もう、子供みたいなこと云うな」

「いいじゃない。眠れないなら、それで」

「不健康だよ」

そう云う僕の声はきつと呆れているような声だっただろう。

太陽が少し傾き始めているお昼下がり。いつも僕らが街に来たとき立ち寄る喫茶店。

街はいつも通り、沢山の人々が行き来する。

「どうして街を歩く他人は、みんな楽しそうなんだろう？」

僕はその人の波を眺めながらふとつぶやいた。

「それはきつと、ここが街だからよ」

ユーリが云う。

「街には沢山人が来るでしょう？それなのに街にいて楽しくなかったら、沢山の人々が楽しくなくなっちゃうじゃない。それに、他人と同じ空間にいるのもね。…だから、みんなで、街は楽しいって、そう云う景色を、作っているんじゃないかな」

「もし街が楽しくなくなったら、みんな街に来なくなる？」

僕が訊くと、ユーリは首を振る。

「それじゃあコーヒーが飲めなくなるわ」

「じゃあ、楽しくなくても、それこそ泣きながらもコーヒーを飲むのかな」

「そうね」

ユーリは考え込む。

遠くで誰かが黒い布を被せられていた。誰か達はそれを横目に通り過ぎる。

「きつと…泣きながらコーヒーを飲むのね。それでもきつと、コーヒーは美味しいと思うわ」

「ふうん。ねえ、君は夏が好きだよな？」

「そうね。冬よりは」

「なんで？」

「…寒いよりは暑い方がいいとか、暖炉の手入れが面倒と云うのもあるけど…」

「暖炉なんて、君はなにもしないじゃないか」

そう云うと、ユーリは膨れる。

「うるさいなあ、たまにはやるわよ。…まあとにかく、そんな理由もあるけど、何より…」

「…何より？」

僕は聞き返す。

「…体が溶けてしまえそうだからよ。溶けて…世界に混ざっている気がするから。暑いと、こう、自分と世界の境界線がわからなくなるじゃない？」

「…そっか」

ゲームコントローラーとアイスクリーム

それでも、目を覚ますと、景色は僕の部屋だった。

…あれ。

僕は初めて夢を見た？確かに見た…ような気がした。

目がやたらと濡れていた。

きつと今にも泣き出しそうな目をしているんじゃないか？

今日は曇りのようで、窓から日はさしていない。

そう云えば、夢の内容は何だっただろう？

あまりよく覚えていない。

今までと違って、自分が何らかの景色の中にいたような、漠然とした感覚はある。でも、詳細な、鮮明な記憶は全く。

でも、ユーリと云う女の子については、確かに夢の中で重要な人だった気がした。

…かわいい女の子だったな。多分。

ああ、今日は土曜日か。

目の前のカレンダーを見て唐突に気づいた。

どつりで、誰も起きている気配がない。

僕は一人部屋を出て、台所へ行く。

やはり、僕以外の家族はまだ寝ているようだ。

僕はお湯をわかし、棚からティーカップと、アールグレイのパックをとりだし、準備した。

パンが一欠片もなかったし、冷蔵庫に至っては殆どの食材がなかった。

近く広い道の側に24時間のスーパーマーケットが出来てからと云うもの、冷蔵庫に物が揃う事が少なくなったように思う。

なぜなら、今の僕のように、なくなったら買いに行けばいいって

思うからだ。

冬の入り口と云っても、外はまだ紅葉もしていないし、太陽は暖かい。

地球温暖化のせいかなんだか知らないけれど、僕が高校に行き始めてからの東京は異常に暖かく感じる。

毎年、この時期なんか、冬をスキップして秋からまた春になっちゃうんじゃないか、なんて思いもする。

広い道に出ても、土曜日の朝なんて、出歩く人はそう多くなかった。

地下鉄の駅に行けばもつともつと沢山いるかも知れないけれど、地下鉄に乗る用事はない。

僕は諦めてスーパーマーケットに入る。

そこもやつぱり、スーパーマーケットの豊富な品揃えが滑稽に思えるほど、客はまばらにしかいなかった。

時々不安に思う。

こんなにお客さんが少ないのに、果たしてここにあるものは全て売れるのだろうか？

もし売れないならば、あの色とりどりの野菜や果物はどうなっちゃうんだろっ？

捨てられるんだよね。きつと…。

だから、スーパーマーケットは嫌いだ。

僕はそそくさと朝のパンと昼の材料になりそうなものを適当に買って、レジに並んだ。

スーパーマーケットに並ぶパンは、野菜は。

捨てられるか食べられるか。運命は2つだけ。

僕には運命と呼べるほど可能性と期待性の高い将来はない。

わかっているのは。

遠い未来に朽ちていく事。
それだけ。

僕は朝とも昼とも云えないような食事をして支度をしたあと、君津の家へ遊びにいった。

彼女の家に行くとき、大抵いつもゲームをしてしまう。
今日もその流れは変わる事がなかった。

「怖い夢は見れたか？」

僕がそのコース一番の難所を曲がったら。君津が尋ねた。

「さあね。怖いかどうかはわからないけど、何か夢は見たみたい」

「中味は覚えてないのか？」

「うん。殆ど」

ただ、ここよりずっと寒くて、空っぽだったような。

「…なんか感覚だけに残ってて、情景は覚えてないって感じ」

君津の車はコーナーで些か外側のフェンスにぶつかって

「でも、怖い夢ではなかった…そんな気がするんだけど」

「そうか。良かったじゃん」

それから暫く僕は画面に集中した。

「そう云えば、君津って学部どうするの？」

「んー、まあ理科と数学は嫌いだから、文系だよな」

学内進学は、多少の要件の違いこそあれ、医学部を除けば、全ての学部から志望学部を選ぶことができる。

「経済学部とか？」

「んーあれも数学いりそうだし…教育とか？」

「先生になりたいの？」

「全く…どっちかってーと子供苦手…」

「ダメじゃん」

君津はあまり学部を考えていないようだった。

「でも、実際大学で学んだ内容を生かす仕事なんて殆どないだろ？教育行っちゃって、先生になる人って寧ろ少数派らしいぜ？」

「…そうなんだ」

「結局大学とか就活しやすいようにする為に行くだけなんじゃないか？」

「…そうかな…」

「でも、僕らが普通に就職なんてできるのかな？」

「…まあ、どうなんだろうな？その時になんないとわからん」

君津は首を傾げて云う。

「いかに普通でいるかを競うのが就職活動じゃない。だから僕ら、やっぱり苦労しそつだよな」

「まあな…」

車は僕の方が一瞬早くテープを切った。

「…だから、就職のこと考えて大学行く気にはならないんだよ」

「まあな…」

これから僕らはどこへ行く？

みんな普通でない人間の中で、とりわけ普通になれない僕らが、それとも普通になる方法がどこにあるんだろうか？

「じゃあ何かに興味を持ってみれば？」

「大学の学部で？」

「まあそれでもいいし、そうじゃなくても、さ。なにかこの先生きる切欠をみつけりゃあいいじゃん」

「切欠ね…」

なんにもないな…。

「…なんか僕は、このまま、コップの水が蒸発するように、少しずつ消えていくように生きていくきがする…」

「…おいおい。ニート一直線なこと云うなよ」

いつの間にか僕らはコントローラを床に置いて話していた。

「…誰か水をくれないかな？」

「…何云ってんだか。おまえちゃんと大学進学はしろよ？何にしろても」

君津は心配そうに僕に云う。

「そりゃあするって、大丈夫」

「学部は？」

「もちろん経済学部だよ」

「もちろん？」

「やる気のない学生は経済学部だろ」

「そうなのか？」

いや、わからないけど。あと本当の経済学部生には明らかに失礼な話だけだ。

経済学部生の皆さん、ごめんなさい。

その日も僕は手を胸の上に重ねて眠る。確かにあれは悪夢じゃなかった気がするし、もっと鮮明な感覚が欲しいと感じている気もある。

殆ど何も覚えていないのに、そんな感覚になる自分は何か変な気がするけど、どちらかと云えば僕はあの夢をもう一度見たい気がしていた。

その日もいくつかの余計な、徒然なことを考えた後、僕は眠りに落ちたようだった。

もし、明日で命が終わってしまふとしたらどうするか？

今日一日何をするか。

人生最後の日を誰と過ごすか？

そんな話を誰かとしたことがあった気がする。

必ず愛する人とずっと一緒にいようとか、おいしいものを目一杯食べようとか、どこか美しい景色を見れる場所へ行こうとか。

或いは逆に、どこか一人になる場所で、これ窓の人生のこと、楽しかった事とか、大変だったこと、悲しかったこと、感動したこと、

そんなことを振り返りながら消えていこうとか。

色々な事を話した気がする。でも…。

それはいつたい誰と、いつ？

この世界では多くの人は、近々死ぬことを覚悟して、或いはあきらめて生きているんだと思う。少なくとも僕はそうだ。

確かに研究のおかげで、『Deadline』を乗り越えれば、しばらく命は長らえられる可能性は高いけれど、それだって100パーセントではない。時々…といっても世界的には結構な数の人が毎日その命を終えている。

それなのに、果たして僕は誰かと、もし今日が最後の命だったとしたらなんて話はするだろうか？

それにしても、死に行くことがこんなに自然に受け入れられるような気がするのは、きっとこの病気、死ぬときに苦痛がないことが分かっているからなんだろう。

それは聖籠病の大きな特徴。患者はまさに眠るように、永遠の旅に出るのである。

「聖なるかごに乗って、天国へ旅立つ」まだ、この病気が一民族の病にすぎなかった頃は、そんな風に言い伝えられていたので、聖籠病、と名付けられているのだ。

そして、僕もまた、この病気にかかっている。先に申し上げた通り。

常に聖者は、僕をかごに乗せるか乗せないか選択しながら、時間は溶けている。

目の前にあるアイスクリームという食べ物を見ながら、僕はそんなことを考えていた。

「時々、ひどく黙っちゃうのね」

ユーリが声をかける。

「いいえ、結構頻繁に、かもしれないけれど」

そう言葉を続ける。

「ああ、ごめん。このアイスクリームっていうのがさ、甘くて冷たくてすごく好きなんだけれど、まだ僕にとつて『変わった存在』なんだよね。つついっばーっと見てしまっただ」

「急いで食べないと、溶けてなくなっちゃうわよ」
笑いながらそう云う。

そう、このアイスクリームも急いで味わってもらわないと、ただのべとべとした液体になっていく。

何の気もなく、音を発する事もなく。ただ自然の流れで、時と熱が、その物体を溶かしていく。

そういう意味では、僕も似たようなものかもしれない。

確かに、表面上は健康だから、僕らはこの病気が突然死をもたらすものだと思っっている。

でも、実際は体のどこかで時限爆弾みたいな器官が、少しずつ、劣化していつて。たまたまそれが運動期間とか、感覚に表れないだけで。実は僕も、このアイスクリームのように、徐々に死んでいつているのかもしれない…。

そうならば、早く僕も味わってもらわないとな…。

そう思っって一人で照れた。

「チョコレート味のアイスクリームができたのって、知ってる？」

「へえ？チョコレート。このミルクっぽい、バニラっぽい味以外でも、アイスクリームって作れるんだ」

「まだ高級品らしいけどね。バニラアイスだっって安いわけじゃないもの。でも、バニラアイスがここ数年でこんなに日常で買えるものになったのを考えたら、チョコレートアイスも、いつか食べられるようになるかもしれないわね」

「チョコレート、好きだっけ？」

「大嫌いよ」

彼女はごく自然にそう答えた。

口の中には、溶けたバニラの甘い味が広がっていた。

サイコロと図書館（前書き）

途中、一般的な文章作法を無視して、ちぐはぐな感じのする所は、意図的にそうしてあります。ご了承ください。

サイコロと図書館

僕はユーリに聞いてみたいことがある。
当然だろ。

聞いてみたいことがあるはずだ。

それは聞く必要のないことで、

聞かなくともユーリが云うであろう答えがわかっていると、

僕がそう思い込んでいることで、

僕がユーリが云うであろう答えをわかっていると、

ユーリは知っている、と

僕が思い込んでいることだ。

つまり、聞いても仕方がなく、聞く必要がないことだ。きっと。

でも、だからこそ聞いてみたいこともある。

確実に解ける問だからこそ、さっさと答えを教えてほしいと考え
てしまうような、そんな感じ。

だけど一方で、僕が上のように感じている壮大な思い込みは、た
だの思い込みでしかなく、

やっぱりユーリは僕が聞いてみたい質問に対して、

僕が想像するのはまったく違う、そして、180度は変わらな
いような答えを用意しているのかもしれない。

間違いがないことは、もしユーリが彼女の思いに対し正直に答え
るならば、僕が問うてみたい質問に対し、何らかの答えを用意して
いるということだ。

でも、彼女が僕のことを深く慮るのであれば、やはりその質問に
対し正直な答えをくれないかもしれない。

頭がこんがらがって来たのだろうか。話はたぶん単純で、僕らは
こんなに分かり合っていると、僕自身は想像しているはずなのに。
わかっていると思い込んでいるからこそわからないこと。

関数を無限大にして収束させるような。

…でも、質問をすることはきつと生産的な結果を生産しては呉れないのではないかと考える。

もしも、ユーリが正直な答えを僕によこさないならば、僕は結局答えを得られないのだろうし、

万が一、彼女が正直な答えを「吐露」するのであれば、きつと何かが決壊してしまう気がするんだ。

メビウスリングと一緒に。

僕らはもう働かない。

病気にかかっているものは、いつ消えるかわからないから、早期労働制度というのがある。

普通に考えて、人間というのは年を経るに従い、死亡率が高くなっていく。

聖籠病患者に関しては、その上昇ペースは常人の比ではない。

高等教育機関「テクノクラート」ではその辺りが目下のところ研究されているらしいのだけれど、確率論、積分学、統計学、そんなのを用いて。

とにかく、普通のペースで働いて、「これから」って時期に死なれては組織としても困る。だから、

僕らは国の保護を受けながら、常人よりハイペースで教育と労働を受ける。

そして、常人の半分のタイミングで「除籍」される。手厚い退職金のようなものを受け取って。

その後も、時給制で働くものもいるけれど。

僕らはそれを選ばなかった。

僕は人一倍そのペースを上げてがんばった。

つまり、ユーリを含めても、その先十分に楽に暮らせるほどに、

僕は学び、働いた。実際、僕はさっき云っていた積分学も確率論も人よりは理解しているし、僕が働いていた貿易財団は、僕の業績

によつて国の発展に大きく貢献した。

だから僕は今こうして、30歳になって、ひたすらユーリを抱いて生きている。

ユーリが働く必要もなく、アイスクリームも食べられるくらいに裕福だ。旅行にもいける。

僕らは多面サイコロを毎日振りながら生活しているのだ。

12の目のうち11は幸福の継続。

12の目のうち1つは幸福の終息。

いや、

そのサイコロは僕だけのものなのかもしれない。

ユーリはどんなサイコロを持っているんだろう。

12の目のうち11は幸福の継続。

12の目のうち1つは…？

それこそが、

僕が答えを知っているということにしている、

君はきつと僕が君の答えを知っていると思っていると、

僕が勝手に思い込んでいる、

だからこそ、僕が君に尋ねてみたい、

そして、君はきつと正直に答えないと、

僕は予想し、

一方では期待し、

一方では、正直に答えてほしいと思つてみたくもなり、

だからこそ、だからこそ？

だけれども？だけれども、

彼女がその質問に正直に答えたならば、

彼女の思いを正直に答えるならば、

きつと僕らは、君は、僕は、

何かを決壊させてしまう気がした。

僕が決壊するのは別にいいなんて思わない。

そんな格好のいいことも云う気はない。

できれば僕は、やっぱりこの幸せを、うわべだけの、あるいは「決してうわべだけではないが、確実に深くまでは差し込んでいない幸い」を、決壊させたくはない。でも、

これはキレイ事ではなく、
やっぱり僕らが決壊することを通じては、彼女を決壊させたくないから。

そして僕が決壊することで、彼女を決壊させたくないから。
更にそれを通じて、また僕を決壊させたくないから、つまり、君を決壊させたくないから…。

結局僕は利己的なのか？他己的なのか？

いや、僕の問いはそんな自問自答自爆的なものではなかったな。

.....

ねえ、

君は、僕が死んだ後、

何を思って、何を思案して、

何を使って、何を使用して、

何を信じて、何を信用して、

何を食べて、何を食事して、

何を得て、何を獲得して、

そして何を愛して生きていく、生きていくつもりなのでしょうか？

ああ、馬鹿らしくなってきた。

どうしてこんなに結核療養所を描写したような文章を読むような気持ちにならなきゃならないんだ。

つまりさ、僕らは幸せなんだよ。

ずっとこうしていられるんだからね。

ずっとこうしていられないんだから。

「でも、聖籠病が子供にうつっちゃう病気じゃなくてよかったわよね。あと私にも」

何度が果てたあと、さすがに疲れ、ぼーっとしていると、ユーリは軽い調子でそう云った。

「どうしてこれだけあげちゃったあとにそういうこと云うかな」

「これだけもらっちゃた後だからよ」

まったく恥ずかしげもなく、一直線にそう返す。

「だって、子供にうつる病気だったら、いろいろ気をつけなきゃならなくなっちゃうし、あまり気持ちよくなっちゃうでしょ？まして、もらったら私に移るって話になっちゃったら、すっごく美味しい毒薬を飲むようなものよ。私、味わう自信ないなあ」 まあ、それでもあなたがそこにいたら飲んじゃう気がするけどね、とユーリは調子を変えずに云う。

「結局何のために生きるのかって云う話になってくるのかなあ。

やだな、私そういう倫理っぽい話」

「自分で言い出したんじゃないか…。まあ、人生の質は安定とか、健康じゃないって云う話か」

「人生の質は、愛情とか、行為の質で決まるって云う話よ」

「何言ってるんだか…」

ユーリはこれでいつも通り。何も変なところがないユーリである。

「明日は早く起きる必要はあったかしら？」

ユーリはまた顔を近づけて、

「ないね。なにもないよ」

僕はまたキスをする。される。

「そういえば、明日はいつ明日になって、今日はいつまで今日なのかしらね？」

一瞬唇を離れたときに、ユーリはそうつぶやいた。

とりあえず、その日のうちに答える暇はなかった。

答えなんかどうせ持っていなかったけれど。

目を覚ました時、全身は異様に火照っていた。自分で自分の体を触るだけでも解る程、全身と云う全身が敏感だった。

「…そりゃあ、あんな夢を見ちゃったらな」
今度は前よりいくらか記憶に僕が残っていた。

僕はユーリと云う女と、飽きる程、でも決して飽きることなく、抱き合っていた。

疲れて眠ってしまう瞬間まで、「僕ら」行為し続けた。
羨ましいと云うか、恥ずかしいと云うか…そんな気持ちと行為の記憶が、体をそんな風にしていた。

「…だから、こんな時間に、目、覚ましちゃったんだな…」
その部屋にまだ朝が来ていないことは明らかで、部屋は限りない群青で満ちていた。

「…それにしても、夢つてのはこうも同じテーマのものを見るものなのかな…。ユーリって女は、間違いなく昨日もいた…」
果たしてストーリーまでつながっていたかどうか…。そこまではよくわからない。

今回にしたって、こっちに戻ってくる直前のシーンが強烈すぎて…いや、そう云うシーンしかなかったんだったかな…とにかく「それ」以外は覚えていない。

わかったことは、ユーリと云う女は、確かに大事な存在だったと云うことだ。

僕の夢の中に於いて…。

夢の話は誰にもしなかった。

その夢が普通の事なのかどうかわからなかったから。
例え普通の事なんだとしても。

普通ではない可能性の高い僕にとっては、普通ではない事かも知れない。

そうだとしたら、その事を知るのは、些か怖い。

その日は、地理でレポート課題が出されて、調べものの為に僕は図書館へ行った。

「しかし、オレたちは受験がないからいいけどさ、受験組はこんな時期に調べものなんかしてる暇ないんじゃないかねえか？」

それについては誰もが同感する所であろう。実際、かなり不満が起こっていたようだ…。

「まあ、そんなにシビアな評価するわけでもないだろうし、いいんじゃない？下手にテストやるよりは」

冷静に考えたら、これがテストの代わりになるって云うんだから、なかなか親切なことじゃないか？

一方で、そう思ったりもする。

この街の図書館の中はいつも明るい。日ざしが入りやすいよう工夫された作りになっていて、いざ来てみると、なかなか居心地はいい。

「あ、机空いたから、とって来るわ」

で、居心地がいい空間として評判がいいので、平日の午後と云う半端な時間にもかかわらず、随分とこんでいる。

だから、空き次第に席をとっておかないと、複数人で座る席はすぐ埋まってしまうんだ。

それは君津に任せて。と、僕はまず、産業のコーナーを物色した。因みにテーマは「とある一つの製品に関し、シェアの多い国や地域、或いはその産業的特徴」をまとめるもの。

結構手の入れ加減が微妙で。適当にやればどうともなるし、本気でやると大学の論文にもなりそう。

因みに僕は（多分君津も）、まだテーマを全く決めていない。早

い話、ここで手頃な本をみつけて、その本に書いてある産業を書こうって云う作戦だった。

「農産物つてのもアリだな…カカオとか…工業製品だったら…車とかか？」

僕はだまかに産業別に分類されている棚を右から左へ、タイトルを物色しながら目をスクロールさせる。

そこに、目が止まったのは、完全なる偶然。或いは、殆ど必然。

「病院・医療」というコーナー！。

目に止まった本の名前。

『ユーリ・ファーマシーの軌跡』

ふと、目についたタイトル。

「…へえ。ユーリって本当にある名前なんだな」

心なしか動揺しているのは、僕がこの名前を見ただけで、夢の中でこのことを思い出してしまっているから。

…はあ、恥ずかしい…。

殆ど無意識的に、僕はその本を手にとった。

課題の足しにはならないだろうけど…。

本と2枚のチケット

その後ほどなくして、ちょうどいい感じの本があったので、僕は調べるテーマを決めた。

君津も同じだった。

僕らはすぐにそれらの本を借りてしまつて、帰つてもよかつたが、せつかく居心地のいい図書館なので、しばらくそこにいた。

図書館の二階には自由に話してもいいスペースがある。もちろん持ってきた本を読んでもいい。

僕らはまた席が空くのを見計らつて、そのブースへ入つた。

「あれ、その本は？調べるの医薬品業界じゃないよな？」

「まさか、医薬品とか難しすぎてわからないし。たぶん」

僕は手をひらひらさせて否定した。

「…でも、ユーリ・ファーマシーって医薬品の会社だろ？またどうして…」

「ん？知ってるの？」

「え、むしろ知らないのか？全然有名な会社だぞ？世界的に」

え？そうなの？もしかして、僕が知らないのがおかしいって話なのか？

「たぶんテレビでCMとかやってるはずだし、いや、たぶんブランド名でCMしているからわからないのかもしれないけどよ」

そのあと君津が云つたシャンプー、洗剤、そして風邪薬は、確かに聞き覚えのあるものだった。

「ああ、それなら知ってる」

「だろ？でも、どうしてまたそんな会社の話なんて知りたいんだ？」

「いや、別に知りたいって言うほどのものじゃないんだけど、ちよつと気になつて」

「ふーん。確か、結構歴史のある会社だよな」

「ずいぶん詳しいな…」

「いやいや、本当に大きな会社だから。確か数百年の歴史があるとか、そんなんじゃないかな」

「数百年??」

「そう。化学がまだまだ発展途上だった頃の店がルーツになってるって話でさ、詳しいって云うんなら、たぶんその話が記憶に残ってるんだな」

「そうなんだ…」

数百年も会社が存続するなんてことがあるものなんだな…。

「元々は個人商店だったって話だぜ。すげーよな。起業だよ。起業」

確か、この話はこの辺りで終了したような気がする。

この時点ではあまり深く考えていなくて。本当にただなんとなく気になったにすぎなかった。

いや、少なくとも自分ではそう思っている。でも、僕は本を借りた。

普段の僕の性格で、普段の僕の頭で、普段の僕の指向で、思考で、ちよつと気になったとか、興味がわいたからとか云って、こんな頭が固まりそんな本を借りることなんてあるのだろうか？

そういう意味では、投げやりな云い方ではあるけれど、やっぱりこの本を借りたのは、何かしらの運命みたいなものだったのかもしれない。

とにかく、僕はこの堅そうな本を借りて、家で暇なときにでも読んでみることにした。

図書館から僕らの家へは電車を使う。

ショッピングモールの間から駅に入り、電車を待つ。

「そいえば、一昨日この駅、人身事故があったんだって」

「マジで？怖っ。やっぱり自殺？」

君津は露骨に顔をしかめる。

「ん。まあ多分ね。そう云うのっではつきり云わないからさ」

もちろん、今のホームはその時の面影なんて全くなくて。何事もなく、（まだ来ていないからわからないけど）数分に一回の割合で電車が無機質にやってくる。

「自殺かあ…嫌な話だけど、電車の人身事故って、いちばん身近に自殺に関係するところだよな」

「僕の知り合いに現場見たって云う人いるよ。男だし、精神的にしつかりしてる人だから、その日の食事がのどを通らなかつたくらいで済んだみたいだけど」

「それはさすがにレアだけどな…。自分の電車が事故で止まったことくらいはあるよな」

まだ夕方と呼ぶには早いホーム。人はまばらで。そのまばらな人たちもみんな、時間に追われていない、どこかうつろで、止まっている人たちが多いような気がした。

実際は主婦って云ったって、学生って云ったって、例えおばあちゃんだって、何かしら忙しいと呼ぶに足るタスクを持っているのかもしれないのだけれど。

それでも、朝の喧騒と比べるとなると、あからさまにそのホームはゆつたりと、ねっとり時間を流れているように感じられた。

「自殺か…オレだってこんなだし、希望に満ちた未来ある若者からは程遠い位置にあるけど、それでも自殺しようとか、もう死にたいとか、そうは思わねえよなあ…」

ま、確かにこの体と心は不本意だけどさ…。そう付け加えた。

「僕も自分が死のうとは思わないけど…もちろんさ。でも、なんだろう。ここで自殺が起きやすいのはすごく分る気がする」

「へえ？」

「だって、『黄色い線の内側』に立っていたってさ。タイミングさえ合っちゃえば。たった二歩だよ。二歩。二歩だけ歩みを進めれば、人生を強制終了させることができるんだ。こんなに気軽に『魔がさし』てしまいそうな場面って、なかなかないような気がする」

「また、怖いこと云うな」

「まあ、そうだけど。でも、そうだろ？」

「…まあな」

時々不気味になるのは、きっと僕がどこかしら同感してしまう、共感してしまうところがあるからなんだと思う。命を強制終了させる人の。

そりゃあ、死にたくはないし。絶望もしていない。

でも、人生を謳歌するに足る希望も理想もない。

でも、とにかく、僕は時々不気味に思ってしまうんだ。

どうして、たった数時間で、こつも、痕跡をなくしてしまうんだろ。人がいた痕跡と。人が消えた痕跡と。

それは、この空間が機能する上で。この世界が流れるうえで。当然でしかなく、それが正しいことではあるのだからうけれど。それも。

やっぱり、その復旧が早く、手際が良ければよいほど。

人はそっけなくて。無機物で。

彼が持っていた絶望は空っぽで。簡単に消えて。消せて。

彼は簡単に…無くなってしまうって。

そんな風を感じてしまうのだった。

「きつと僕が抱えている悩みとか、わだかまりみたいなものだった…」

「ん？どうした？」

君津が怪訝な顔で僕を見ていた。いつの間にか僕は考えていたことを口に出してしまっていたようだ。

「…ああ、いやなんでもないよ。あ、電車が来たみたいだ」

来た電車は準急だったか。快速だったか？

まあなんでもいいや。どうせ僕らはすぐに下りてしまうのだから。

車内は確実に移動しているはずなのに、ホーム以上にその空間は止まっている。

あまりにも緩やかで。この電車がターミナルに向かって人よりもずっと速いスピードで向かっていることさえ、弛緩させるような止まった時間。

「電車って、ついつい眠くなっちゃうよね。なんでだろ」

「なんかこの揺れがそういう感じにしてんじゃん？単調すぎて心地いいし。あと最近の電車は、って昔のは知らないけど、電車って静かでスムーズじゃん？」

そう。スムーズ。電車はそれこそ人に邪魔されない限りスムーズに目的地まで着くことができる。

あまりにもスムーズな動だからこそその静。それがここにあつて。そして僕は眠くなる。

動きがないのは、いまの僕自身と一緒にだ。一瞬思った。

僕は進みも戻りもしない。乱れも揺れるもしない。とても静かな个体。自分をそのように認識している。

でも、本当は全然違う。

電車と違って僕は、ターミナルに向かっていているということはない。ただ、止まっている。モガク気にすらならないほどに。

スムーズな動なんかじゃなく、ただの止まった个体。

でも、見えるだろう？

外から見ればきつと、スムーズな歩みを進めているようにさ。

だつてもう、大学に行くことが決まっちゃってるんだから。

「眠いんなら寝たら？起こしてあげるよ」

…そんな言葉を最後まで聞くか聞かないかのうちに。僕は沈んでいった。

「ねえ、話きいてる？」

ユーリの声にはっとする僕。

あれ、いま妙にぼーっとしていた。なんだったんだ？

気がつくと？いや、もう半時程はここにいるはず。ここはいつものコーヒーショップ。

僕はまた医者への帰りにここで3時の軽食にしていたんだ。

「ん？ごめん。ついぼーっとしてた。春の風が気持ち良くてさ」

「もう。何それ」

「ごめんごめん。それで？」

「来月のリルダの結婚式の事よ。あの子、今大陸の方にいるでしょ？式もあつちなよ。相手方が住んでいてね」

「へえ。そうか。じゃあちよつとした旅行になっちゃうね」

「そうなの。船を予約しておかないと」

リルダと云うのは、大陸で高等学院に留学している、ユーリの妹で、僕も何度か会ったことがある。

「ついだから、大陸の方を旅行しようか。1ヶ月くらいどうだ？どうせ暇だし」

「私もそう提案しようと思っていた所。やっぱり旅行するしかないわよね」

と云う訳で、僕らはその足で大陸行きの船を予約する。

流石に準備が居るので、出発は再来週にしておいた。

「妹さん、どこにいるんだっけ？」

「えーと、アイナハイゼムよ」

「へえ。すごい所に留学してるんだ」

アイナハイゼム学院都市は、特に理系学問の開拓が著しく盛んな場所で、さまざまな文明の原動力になっている所だ。

「なんか化学って云ってたけど。何？」

「化学。それはまた、新しい学問を研究してるんだ。あれはかつて錬金術とか呼ばれていたやつだろう？すごい話だ」

錬金術は別の物質から金を作る方法を見つけようってやつだ。いろいろな実験をしてね。

「…で、金は作れなかったんだけど、色んな物質に関する研究が進んで、それが化学になったって訳」

「へえ？ そうなの？ そんなすごいような研究してるって、知らなかったわ」

「なんだよ。妹の仕事くらい、把握してなきゃ」

「あはは。難しい話は私はてんでダメ。私はただの奥さんだもの」

「まあ、それもそうか。で、船、どこで申し込む？ あの辺で良いところって云つたら……」

「保養地があるわね。なんだっけ？ エルピス？」

「ああ。そうか。じゃあそこに行こっか。この季節ならそんなに混んでないし、いいだろう」

僕は窓口に行き、東の大陸行き航路の南路線の切符を買った。

これはエルピスに最も近い港に寄港する船で、そこからなら鉄道でエルピスへ行けて便利なんだ。

「うふふ。旅行って好き。いつもと違うって感じが好き」

ユーリはいつもより上機嫌。いいことだ。

「日常ね…働きもしないで、ずっと二人でいる僕らの暮らし自体、普通の人にはあまり日常っぽくない気もするけど」

ずっと夢の中にいるような。

それくらい幸せで、ふわふわした、不安定な日々。

「夢の中で夢を見たっていいんだから、非常からさらに非常へ逃げるのだから、誰も止められないんじゃない？」

まあ、それもそうか。

「ふふ。船って一泊よね。個室とった？ 大丈夫？」

「ああ。もちろん。あんまり広いのじゃないけどな」

「狭くていいわ。ベッドがあれば充分。あとは何も要らない」

彼女はきらきらしながら僕に身を寄せてきた。

やっぱりこんなのが日常なわけがないな。

きつとずっと夢なんだ。

僕の人生全部。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6318j/>

夢を渡る

2010年10月28日05時34分発行